

四

次の短歌を読んで、問いに答えなさい。

A 湧きいづる泉の水の盛りあがりくづるとすれやなほ盛りあがる

窪田空穂

B いづくにか父の声きこゆこの古き大きな家の秋のゆふべに

若山牧水

C 楽章の絶えし刹那の明るさよふるさは春の雪解なるべし

馬場あき子

D せてわが自由になるものを自由にせむ、自由なるもの②三つか二つを

土岐善磨

(注) 刹那—きわめて短い時間。瞬間。

雪解—雪が解けること。雪どけ。

問一 —線①「湧きいづる泉の水」とありますが、これはどのような動きをしていますか。次の文の□にあてはまる言

葉を書きなさい。

□動きをしている。

問二 B・Cの短歌の句切れを、ア～オからそれぞれ選びなさい。

ア 初句切れ

イ 二句切れ

ウ 三句切れ

エ 四句切れ

オ 句切れなし

問三 B・Cの短歌の鑑賞文として最も適当なものを、ア～オからそれぞれ選びなさい。

ア 家族と故郷で過ごす時間をしみじみといとおしむ気持ちが感じられる。

イ 故郷で聴いた楽曲に思いをはせ、春までには帰りたいと思っている。

ウ 亡くなった家族の面影を家の中に感じて、悲しみをかみしめている。

エ 静かさの中に孤独を感じ、故郷に戻りたいと切実に願っている。

オ 一瞬感じた明るい気持ちに、故郷の春の情景を重ね合わせている。

問四 —線②「三つか二つを」のあとに省略されている言葉を、短歌の中から書きぬきなさい。

次の文章を読んで、問いに答えなさい。

「僕」は自分のことを、全くとりえもなく、人好きもしない生徒だと思っている。ある日「僕」は、サーカスのテントの陰に、痩せて背骨のへこんだ痛々しい馬がつかねがれているのを目に止める。「僕」にはその馬が、自分と同じように、(まあいいや、どうだって。)とつぶやいているように思えた。

靖国神社の見せ物小屋の周りをぶらつくことにしてもそうだった。もう、その頃の僕らの年頃では、いんちきに決まっているろくろ首のお化けや、拳闘対柔道の大試合なんかにたいした興味はない。お祭りで学校が休みになれば、^①気のきいた連中は日比谷か新宿へレビューか映画を見に行ってしまう。僕だって、どうせ遊ぶのならそっちの方がいいに決まっていると思うのだ。けれども僕はなんともなしに境内をあちらこちら人波にもまれながら歩いていた。

だからその日、僕がサーカスの小屋へ入っていったのも別段、何の理由もなかったのだ。僕はむしろ敷きの床の上に、汚れた湿っぽい座ぶとんを敷いて、熊の相撲や少女の綱渡りなど同じようなことが果てもなく続く芸当を、ぼんやり眺めていた。が、ふと場内を見渡しながら僕は、はっとして目を見張った。……あの馬が見物客の真ん中に引っ張り出されてくるのだ。^②僕は団長の親方が憎らしくなった。いくら、ただ食べさせておくのがもつたないからといって、なにもあんなになつた馬を見せ物にしなくたっていいじゃないか。

馬は、ピロードの金モールの縫い取りのある服を着た男にくつわを引かれながら、申しわけなさそうに下を向いて、あの曲がった背骨をがくがく揺すぶりながらやって来る。くらはも着けずに、今にも針金細工の籠のような胸とお尻とが、ばらばらに離れてしまいそうな歩き方だ。しかし、どうしたことか彼が場内をひと回りするうちに、急に楽隊の音が大きく鳴りだした。と、見ているうちに馬はとことこと走りだした。

^③周りの人は皆、目を見張った。楽隊がテンポの速い音楽をやりだすと、馬は勢いよく駆けだしたからだ。すると高いポールの上上がったいた曲芸師が、馬の背中に——ちょうどあの弓なりにへこんだ所に——飛びついた。拍手が起こった。

驚いたことに馬はこのサーカス一座の花形だったのだ。人間を乗せると彼は見違えるほど生き生きした。馬本来の勇ましい活発な動作、その上に長年鍛え抜いた巧みな曲芸を見せ始めた。楽隊の音につれてダンスしたり、片側の足で拍子を取るように奇妙な歩き方をしたり、後ろ足をそろえて台の上に立ち上がった……。いったいこれはなんとしたことだろう。あまりのことに^④僕はしばらくあつけにとられていた。けれども、思い違いがはつきりしてくるにつれて僕の気持ちは明るくなった。

息をつめて見守っていた馬が、今火の輪くぐりをやり終わって、やぐらのように組み上げた三人の少女を背中に乗せて悠々と駆け回っているのを見ると、僕は我に返って^⑤一生懸命手をたたいている自分に気がついた。

(注) 拳闘——ボクシング。 レビュー——歌と踊りを主体としたショー。
ピロード——織り方の一つ。なめらかでつやのある織り方。
(安岡章太郎「サーカスの馬」より)

問一 ——線①「気のきいた連中は日比谷か新宿へレビューか映画を見に行ってしまう」とありますが、それはなぜですか。その理由を述べた次の文の□A・Bにあてはまる言葉を、文中から二字以上五字以内でそれぞれ書きぬきなさい。

・見せ物小屋は、□Aに決まっているものや、たいして□Bのないものをやっていたから。

問二 ——線②「僕は団長の親方が憎らしくなった」とありますが、その理由として最も適当なものを、ア～エから選びなさい。
ア 何の芸もできない馬だが、申しわけなさそうに歩く姿もサーカスの一つの出し物として見せようとしていると思っただから。

イ とても芸ができそうに思えない馬を見物席に引っ張り出して、みんなの前で芸を教えようとしていると思っただから。
ウ サーカスに連れてきて何もせずにおくのはもつたないから、あわれな馬をわざわざ見せ物にしようとしていると思っただから。

エ 今はまだ芸はできないのに、サーカス団の一員である馬をみんなに覚えてもらうために引っ張り出してきたと思っただから。

問三 ——線③「周りの人は皆、目を見張った」とありますが、それはどのような様子を見たからですか。文中の言葉を用いて、十五字以内で書きなさい。

問四 ——線④「僕はしばらくあつけにとられていた」とありますが、馬が何をするのを見たことによりですか。文中から十二字で書きぬきなさい。

問五 ——線⑤「一生懸命手をたたいている自分」とありますが、このときの「僕」の気持ちの説明として最も適当なものを、ア～エから選びなさい。

ア 馬のすばらしさをたたえながら自分にも希望を感じている。

イ 馬が失敗することなく芸をやり終えたことに安心している。

ウ 馬の曲芸を見て、自分もサーカスに入りたいとあこがれている。

エ 馬が思ってもいなかったほど速く走ることに感動している。

問六 ——線「思い違い」とありますが、どのように思っていたのが、実際はどうだったのですか。文中の言葉を用いて、四十字以内で書きなさい。

次の文章を読んで、問いに答えなさい。

舶来品をやたらに重宝がる日本人の気質に反して、^①なぜ椅子だけが歴史的に定着してこなかったのか。中国経由で渡来した異国の珍品たちは、「唐物」と言って今なお茶の湯の世界では最高級品としての格式を与えられている。しかしながら椅子に関してだけは、かつてそれが渡来していた痕跡すらも忘れ去られているような感がある。

理由はいろいろと考えられる。まず椅子やテーブルは、狭い日本家屋の中ではやたらに場所をとる。一つの部屋で食事もし、書も綴り、茶を点てては、寢室としても用いるという日本家屋の合理的な特性からすると、椅子やテーブルが大きく場所を占めていると部屋の用途が制限されてしまつて具合が悪い。これは現代人の住宅事情と照らし合わせても十分納得のいくことだろう。

あるいは家をこしらえるとき、現代人の常識ならばまず箱をつくり、内装を施し、家具を選んで椅子を決める、というのが順当なところだろう。

日本家屋のつくりというのは^②これとはまったく逆で、まず「坐る」ということからすべてが発する。畳のモジュールや天井の高さ、梁や長押の位置や寸法、あるいは障子や襖の開け閉めの作法から「手掛かり」の位置まで、日本家屋の空間は、「坐の視点」を基準にすべてが秩序立てられている。

かつて筆者が京都の竜安寺を訪れたときのことである。ある外国人旅行者が二階から見るとような視線から「石庭」を睨んではバチバチとシャッターを切つて「フアンタスティック（すばらしい）！」と言つて悦んでいる。^③おせっかいとは思いつつも、「まあこつちへ来てゆっくり坐つてご覧なさいよ。別の世界がみえますよ」と誘つてみた。日本文化のファンであるらしい背の高い金髪の青年は、筆者の傍らでしばらく庭を鑑賞しながら何を思ったのか、「これは私たちの文化にはない世界との関わり方です！」と目をまん丸く見開いて訴えていた。

そもそも家というものは、そこに棲まう人々の物の見方や感じ方を根本的なところで育てる役割を果たしていて、たとえば高い目線から庭を見下ろすと、その全体像を把握するには都合がいい。しかし、庭を構成する石の存在感や空間の奥行き、そこに流れる空気の質感までも味わおうとするのであれば、庭の片隅に坐つてその空間に身を委ねてしまうのがいい。ことに風雅な日本の芸術家たちにとつて、「造化の妙」というのは至高の価値をもっていて、家屋の意匠にも外界の自然と親しく交わり、自然を上手にとり入れるための努力がさまざまな形で払われてきた。室内と庭とを隔てない縁側の意匠はその最たるもので、家に居ながらにして自然を体感できる装置にもなっている。あるいは、部屋の内から外を眺めたとき、床と柱と長押とに縁取られた縁側の空間が、外の世界を絵画のように切り取つてはまた別の世界を見せる。朝早い時間などは陽射しが逆光となつて草木が眩しいほどのハレーションを起こし、強い光に包まれた空間世界はあたかも映画のように住む者の身体を包み込む。

^④この詩的な空間に人間の入り込む余地があるとすれば、その姿勢は必ず床坐でなければならない。日本家屋に込められた諸々の意匠や空間スケールのバランスは、かつて日本人が事物の鑑賞に際して立つて行うという作法をもたなかったことを如実に物語っていて、その緻密に計算された空間の調和は、不作法に突っ立つていられたならば、まるで台無しになってしまう。

(矢田部英正「椅子と日本人のからだ」より)

(注) モジュール—寸法。

長押—和風建築で、柱と柱の間にわたす横木。

手掛かり—手をかける所。

造化の妙—自然の美。

至高—この上もなくすぐれていること。

意匠—デザイン。

ハレーション—強い光が当たつた部分のまわりが白くぼやける現象。

問一 — 線①「なぜ椅子だけが歴史的に定着してこなかったのか」とありますが、その理由をまとめた次の文の A・B にあてはまる言葉を、十五字以上十八字以内でそれぞれ書きなさい。

・椅子は、日本家屋の A という特性を制限してしまつたから。

・椅子は、日本家屋の B という空間に合わないから。

問二 にあてはまる言葉として最も適当なものを、ア〜エから選びなさい。

ア だから イ ところが ウ さらに エ または

問三 — 線②「これ」がさしている部分を、「〜という方法。」につながるように、文中から二十六字で探し、初めと終わりの五字を書きなさい。

問四 — 線③「おせっかいとは思いつつも誘つてみた」とありますが、筆者がこのような行動をした理由として最も適当なものを、ア〜エから選びなさい。

ア 石庭の全体像をもっとゆっくり把握してほしいと思つたから。

イ 立つたままで写真を撮る不作法をたしなめたいと思つたから。

ウ 日本文化を深く理解している姿がとても好ましいと思つたから。

エ 石庭がもつ本来のすばらしさを実感してほしいと思つたから。

問五 — 線④「この詩的な空間に人間の入り込む余地があるとすれば、その姿勢は必ず床坐でなければならない」とありますが、「床坐でなければならない」理由を述べた次の文の にあてはまる言葉を、文中の言葉を用いて、十字以内で書きなさい。

・事物の鑑賞に際して「立つて行うという作法」をもたない日本人がつくつた空間を味わうためには、その空間に ことが最もふさわしいから。